

研究論文

ソーシャルワークにおける面接形態が親支援に
及ぼす影響に対する保育を学ぶ学生の見解

松山 郁夫*

Recognition of the Support to Parents by the Form of Social Work Interviews
in University Students Learning Childcare

Ikuo MATSUYAMA*

【要旨】

本研究では、面接形態の違いが親支援に及ぼす影響に対する保育を学ぶ学生の認識について検討した。保育を学ぶ学生を対象として、子育てをする親に対するソーシャルワーク面接による支援の有効性をどのように捉えているのかを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票を用いて調査し分析した。その結果、多様で深刻な悩みには面接室、日常生活習慣や情緒的問題には生活場面での面接が効果的と捉えていると考察した。

【キーワード】

保育を学ぶ学生、子育てをする親、ソーシャルワーク面接 生活場面面接

I. はじめに

現在、社会福祉士養成校で使用されている相談援助演習に関するテキスト¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾では、ソーシャルワークに関する演習（相談援助演習）によって、①ソーシャルワークの知識、技術、価値、実践に関して事例検討による演習形式等で理解を図る。②対人関係能力の向上によって面接やグループワークに対応できるようになる。③自己理解を深める。④ソーシャルワークに要する思考ができるようになる。これらを目指す旨、主張されている。また、その方法として①参加型の授業を行う。②社会福祉の課題を事例検討等により理解を深める。③グループディスカッションやロールプレイ等によってソーシャルワークの思考を深めながら、相談援助の技法や技術を実際的に学習ができるようにする。以上を求めている（松山 2013）⁶⁾。社会福祉士養成における相談援助演習では、ソーシャルワーク実践に関する実際の演習によって、多様で深刻な問題に対応できるソーシャルワーカーを養成する方向にある。

人は社会的諸制度の相互作用における広範な社会との脈絡のあるところで機能する。このため、ソーシャルワークでは、①問題解決や処理能力を高めて人の成長力を増進させる。②資源とサービスを人に提供するシステムの人的操作やその効果を促進させる。③資源・サービス・機会を提供するシステムを人と連携させる。これらが目標となる（Baer & Federico 1978）⁷⁾。さらに、ソーシャルワークについては、個人の社会的機能を個別的・集団的に高めようとするもので、人間とその環境との間の相互作用を構成している社会関係に焦点を合わせた諸活動によってなされると指摘されている（Boehm 1959）⁸⁾。

社会福祉の専門職としてソーシャルワーカーはクライアントの主訴からはじまる問題と関わるなかで、家族が抱える問題と繋いでそれを理解し、援助をはじめめる手がかりをどこに見出すのかといった問題に

*佐賀大学大学院学校教育学研究科

直面する。特に近年、児童虐待問題、育児不安、高齢者の長期ケアにおける家族の負担等、家族生活における諸課題を多く抱え、さらには、所謂多重問題家族と呼ばれるような一つの家族内の問題が更なる問題を発生させるなど、ソーシャルワーカーが取り組む家族内の問題もより複雑さを増している。家族関係は相互的なものであり、家族もまた援助を求めている場合が多い。したがって、それぞれの家族員、および家族全体の生活を見渡した上での援助計画でなければならず、家族関係のダイナミクスを理解しなくてはならない（小口 2011）⁹⁾。

人の生活は常に進行していくため、新たな問題に直面しては、その問題を解決していく連続した過程である。つまり、人の人生や生活は問題解決の連続であるため、社会福祉の支援においては、それらを踏まえて援助しないと効果的な援助にならない。このため、問題解決の過程を重視する必要がある。ソーシャルワーカーは人生や生活上の問題に悩んでいる人と共に、その力を生かしてはじめて問題を取り扱う存在であるため、人(person)、場所(place)、問題(problem)、過程(process)の「4つのP」を中心に、個人が社会的に行動する間に起こる問題をよりよく解決する過程を重視しなければならない（Perlman 1957）¹⁰⁾。

これらのようなソーシャルワークのあり方は、保育の現場においても同様で、保育の現場における親支援に不可欠と考えられるようになってきた。平成29年度まで用いられる保育所保育指針では、保護者支援について、保育士が保育に関する専門知識・技術を背景としながら、保護者が支援を求めている子育ての問題や課題に対して、保護者の気持ちを受止めつつ、安定した親子関係や養育力の向上をめざして行う子供の養育（保育）に関する相談、助言、行動見本の提示その他の援助業務の総体としている（厚生労働省 2008）¹¹⁾。つまり、保育士がソーシャルワーク機能を果たすことが期待されていた。

改正された保育所保育指針＜平成29年告示＞が厚生労働大臣告示(平成29年3月31日)として明示され、平成30年4月1日から適用となる。

この指針における「第1章総則 1 保育所保育に関する基本原則」の「(1) 保育所の役割」のなかで、保育所は、入所する子供を保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、その保護者に対する支援および地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである。「(2) 保育の目標」において、保育所は、入所する子供の保護者に対し、その意向を受け止め、子供と保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性を生かして、その援助に当たらなければならない。また、「第2章保育の内容」の「(3) 保育の実施に関わる配慮事項」のなかで保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに、保護者からの相談に応じ、保護者への支援に努めていくこと。と記述されている（厚生労働省 2017）¹²⁾。

これらより、保育士には、乳幼児の保育のみならず、地域の社会資源との連携を図り、親との信頼関係を築きながら親支援を行う責務があるため、その業務にソーシャルワークが明示されたものと捉えられる。

ソーシャルワークは主に面接によってなされる。面接とは、専門的方法を用いながら、クライアントにおける日常生活の状況に対応して、総合的に継続して行われる過程で、対面関係、信頼関係、協同・協働・参加を重視した技術的過程からなる援助活動である。ソーシャルワーク面接には、情報収集のための面接、アセスメントのための面接、治療的面接がある。これらより、ソーシャルワーカーには、自らの質問や反応に的確さが求められる（Kadushin 1998）¹³⁾。

生活場面面接については、ソーシャルワーカーの日常業務の中で比較的短時間で、しかも面接室以外のもので展開されるかわりとされている（久保 1991）¹⁴⁾。これは、面接室を生活場面に置き換えて、現実の生活の中で起きる諸問題を指導・治療に活用するように意図したもので、クライアントの自宅やベッドサイド、廊下等の日常生活空間の中で非構造的な面接を行うものである。つまり、構造化されてい

ない日常生活の中のある場面における面接であるため、リラックスした状態でコミュニケーションをとることになる。

また、クライアントにおける実生活上の問題が取り上げられるため、具体的な問題や生活上の課題を把握しやすいだけでなく、その場で必要な働きかけも容易である。クライアントが何か問題を起こした時のその場の即座の情緒的介入として、コミュニケーションの手段を確保し、自己を取り戻すことを助けるために行われる介入方法とされている（小松 2000）¹⁵⁾。日常生活場面に生じる困難な状況に変化を起こす過程に利用者が関わるため、クライアントのコミュニケーションを支えていく方法として、意図的に活用する必要がある。

保育士には、ソーシャルワーク機能を果たすように要求されているため、子育てをする親に対する生活場面面接の重要性を認識するとともに、面接の形態が支援内容に及ぼす影響についても把握しておかなければならない。また、保育を学ぶ学生には、保育士養成カリキュラムのソーシャルワークを学ぶ科目である相談援助において、面接形態の違いが子育てをしている親への支援に及ぼす影響について考察できるようになることが求められる。しかしながら、諸研究において、これらへの言及がなされていないため、保育を学ぶ学生がソーシャルワークにおける面接に対してどのように捉えているのか、また、面接形態の違いが親支援にどのような影響を及ぼすと認識しているのかを明らかにした上で、保育を学ぶ学生へのソーシャルワークに関する教育について検討するべきであろう。

以上より、本研究では、ソーシャルワークにおける面接形態の違いが、子育てをしている親への支援に及ぼす影響について、保育を学ぶ学生がどのように捉えているのかを検討することを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、保育を学ぶ学生を対象として、子育てをする親に対するソーシャルワークにおける面接室での面接による支援、および生活場面面接の有効性をどのように捉えているのかを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票による調査を実施した。

調査対象は、A県B市C大学において保育士の取得を目指し、保育所実習の経験があり、ソーシャルワークの科目を学んでいる3年生とした。合計96名からの質問紙調査票が回収され、分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する学年・性別を付記した。

分析対象者のプロフィールについては、全員大学3年生で、男性4名（4.2%）、女性92名（95.8%）であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成29年1月とした。

調査方法は、C大学において保育を学ぶ学生に本調査の目的を説明し、協力することを了承した学生に質問紙調査票を配付し、その場で回答してもらった。

倫理的配慮として、①回答は個人を特定できないように数値化して集計する。②回答の協力は任意である。③回答への記入は無記名で行う。これらの旨を説明し、同意を得られた学生のみ本調査への協力を求めるようにした。

3. 調査項目の作成手順

保育を学ぶ学生10名に、子育てをする親に対するソーシャルワークの面接による支援が、どのようなことに役立つかを質問した。回答は箇条書きで思いっくだけ書いてもらうようにした。得られた回答の

うち複数回答のあった内容をすべて使用して、22項目の質問項目を作成した。なお、ソーシャルワークにおいては、各対象の状況に応じてきめ細かい対応が不可欠である。そこで、回答に含まれている意味内容をなるべく細分化しながら質問項目の作成を行った。

子育てをする親に対するソーシャルワークにおける面接室での面接、および生活場面面接による支援の有効性の度合いを問う独自の各22項目の質問項目における回答は、「まったく有効でない」(1点)、「あまり有効でない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度有効である」(4点)、「かなり有効である」(5点)までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1～5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、子育てをする親に対するソーシャルワークにおける面接室での面接、および生活場面面接による支援の有効性の度合いを問う独自の各22項目の質問項目間で、各平均値の差について t 検定による有意差検定を行った。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

Ⅲ. 結 果

子育てをする親に対するソーシャルワークにおける面接室での面接、および生活場面面接による支援の有効性の度合いを問う独自の22項目の質問項目に関して、各項目の平均値・標準偏差、および t 検定によって算出された t 値については表 1 の通りであった。

面接室での面接による支援の有効性の方が有意に高いのは、「1. 親の子育ての相談に対応すること」、「3. 親の悩みを傾聴すること」、「4. 孤立している親を支えること」、「5. 障害のある子供を持つ親を支えること」、「8. 子供の発達に不安のある親を支えること」、「15. 人間関係に悩みを持つ親を支えること」、「16. 家族関係がよくなるように支援をすること」、「17. 問題行動が目立つ子供の親を支えること」の8項目であった。発達に問題がある場合や障害がある場合等、子育てに関する相談に関する深刻なもののみならず、人間関係や孤立している場合等の親自身の問題に対する対応が含まれていた。子供だけでなく親自身の深刻な悩みに対処する内容の項目であると示唆された。

生活場面面接による支援の有効性の方が有意に高いのは、「2. 親との信頼関係をつくること」、「7. 子供の体調に不安のある親を支えること」、「10. 偏食のある子供の親を支えること」、「11. 更衣ができない子供の親を支えること」、「22. 母子分離不安が強い子供の親を支えること」の5項目であった。

保育を学ぶ学生は、生活場面面接による支援の方が面接室での面接よりも、親との信頼関係を築きながら、子供の体調や基本的な生活習慣だけでなく、母子関係に関する情緒的な支援に対して有効性が高いと認識しているものと示された。

表1 面接形態による支援の有効性に関する質問項目の平均値・標準偏差・t値

質問項目	面接室での面接		生活場面面接		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1. 親の子育ての相談に対応すること	4.49	.580	4.27	.774	2.330*
2. 親との信頼関係をつくること	4.22	.691	4.58	.691	3.749**
3. 親の悩みを傾聴すること	4.53	.615	4.14	.878	3.437**
4. 孤立している親を支えること	4.06	.779	3.78	.861	2.779**
5. 障害のある子供を持つ親を支えること	4.36	.564	3.86	.790	5.969**

6. 園に行きたがらない子供の親を支えること	4.04	.631	3.95	.851	.895
7. 子供の体調に不安のある親を支えること	3.95	.745	4.22	.728	2.742*
8. 子供の発達に不安のある親を支えること	4.30	.634	3.98	.781	3.385*
9. お友達の中に入れない子供の親を支えること	3.84	.812	3.78	.861	.575
10. 偏食のある子供の親を支えること	3.70	.769	3.91	.712	2.076*
11. 更衣ができない子供の親を支えること	3.73	.814	4.06	.693	3.368*
12. 子育てと仕事の両立に不安のある親を支えること	4.04	.780	3.92	.991	1.284
13. 親が子育てに自信を持てるように支援すること	4.16	.701	4.06	.949	.877
14. 子育てをする親の気持ちに寄り添うこと	4.29	.695	4.44	.693	1.577
15. 人間関係に悩みを持つ親を支えること	3.98	.740	3.57	.867	3.820*
16. 家族関係がよくなるように支援をすること	3.54	.832	3.18	.940	3.316*
17. 問題行動が目立つ子供の親を支えること	4.10	.607	3.81	.850	3.199*
18. 子育てに不安を抱える親を支援すること	4.28	.517	4.24	.707	.564
19. 子育てに悩む家庭の状況を把握すること	4.03	.760	3.94	1.003	.779
20. 子供の反抗期に悩む親を支えること	3.90	.732	3.88	.771	.228
21. 子育てに関する親のニーズに対応すること	3.99	.801	3.90	.852	.869
22. 母子分離不安が強い子供の親を支えること	3.89	.709	4.11	.724	2.403*

* $p < .05$ ** $p < .01$

IV. 考 察

保育を学ぶ学生は、発達に問題がある場合や障害がある場合のような、子育てに関する相談に関する深刻なもののみならず、人間関係や孤立している場合等の親自身の問題に対する対応を含めて、面接室での面接による支援の方が生活場面面接よりも有効性が高いと捉えていた。

保育所保育指針<平成29年告示>「第4章 子育て支援」の「保育所を利用している保護者に対する子育て支援」において、子供に障害や発達上の課題が見られる場合には、市町村や関係機関と連携および協力を図りつつ、保護者に対する個別の支援を行うよう努めること、また、不適切な養育等が疑われる家庭への支援において、保護者に育児不安等が見られる場合には、保護者の希望に応じて個別の支援を行うよう努めることとされている（厚生労働省 2017）¹⁶⁾。

親は子育てに関して様々な悩みを持っている。子供の障害や問題行動、或いは親の人間関係等、深刻な悩みも多いため、保育士がカウンセリング・マインドを有する必要がある（石井 2002）¹⁷⁾。ジェネラリスト・アプローチを採用すると、親子の課題解決に際して、家庭背景や地域の状況などの背景を捉えることが可能となり、多様なシステムへの関わりが可能になる。また、保育士には、親子の状況を「人-環境」の視点から理解するスキルの向上が求められる（伊藤・若宮・桐原・宮崎 2008）¹⁸⁾。

これらより、保育士には、①親に寄り添った支援をする。②親の多様で深刻な悩みに対応するカウンセリングを行う。③ジェネラリスト・アプローチによる包括的視点から問題解決を図るソーシャルワーク・モデルに基づく支援をおこなう。以上のような、ソーシャルワークの理論と方法に基づく相談援助の機能が求められている。保育を学ぶ学生は、親の多様で深刻な悩みに対して、包括的な支援を要すると捉えている。また、面接室において面接をする方が、多面的なアセスメントをしながら支援ができる状況にあるため、生活場面面接よりも適切な形態と捉えているものと考えられる。

保育士には、保護者とのパートナーシップ形成のための面接技法を習得することが求められる（鶴 2005）¹⁹⁾。今回の調査において、保育を学ぶ学生は、生活場面面接による支援の方が面接室での面接よ

りも、親との信頼関係を築きながら、子供の体調や基本的生活習慣のみならず、母子関係に関する情緒的な支援に対して有効性が高いと認識していた。

保育所実践では、エコロジカル・パースペクティブ(ecological perspective;生態学的視座)が必要で、保育士がこの視点を身につけることで、親子の生活の多面性、多様性、複雑性、連続性を認識できる。そうなってくると、支援においては子供・家族・地域間の交互作用に注目しながら、子供とその環境に働きかけることや、保護者とのパートナーシップの形成が重要とされている(土田 2006)²¹⁾。

ソーシャルワークにおける「状況の中の人」(person in the situation)について、エコロジカル・パースペクティブから考察すると、「状況の中の人」の特質とは、「個人と環境との力動的一体化」と「主体的存在としての本人」である。人と環境とは切り離せないものであり、かつ状況下にある主体はその本人でしかあり得ない(河野・岩間 1999)²²⁾。さらに、保育ソーシャルワークを実践していくうえで、子供や保護者の生活全体をエコロジカルな視点で捉え、理解するためのスキルを保育者が習得する必要がある。それは普段の保育における丁寧な観察やコミュニケーション等を通したアセスメントの方法と言及されている(山本 2013)²³⁾。

これらより、保育士には、ソーシャルワークの視点から子育てをする親との信頼関係を構築すること、面接技法を習得すること、およびエコロジカル・アプローチを実践することが求められる。したがって、保育士は、生活場面面接の技術を習得する必要がある。特に、子育て相談を行う場合、保護者と共有できる場である送迎の時間帯を活用して、継続的に毎日かわる保育士が保護者の相談を受ける重要性が指摘されている(安藤 2008)²⁰⁾。

改正された保育所保育指針<平成29年告示>における「第4章子育て支援」の「2 保育所を利用している保護者に対する子育て支援」では、子供に障害や発達上の課題が見られる場合には、市町村や関係機関と連携及び協力を図りつつ、保護者に対する個別の支援を行うよう努めること。「(3) 不適切な養育等が疑われる家庭への支援」では、保護者に育児不安等が見られる場合には、保護者の希望に応じて個別の支援を行うよう努めること、保護者に不適切な養育等が疑われる場合には、市町村や関係機関と連携し、要保護児童対策地域協議会で検討するなど適切な対応を図ること。虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。と記述されている(厚生労働省 2017)²⁴⁾。

保育士には、子育て支援に関する相談を中心とした相談援助機能の向上が求められている。関係機関との連携では、保育ソーシャルワークの視点から、これまで保育施設・保育者には明確に意識されてこなかった間接援助技術としてのコミュニティ・ワークやソーシャル・アドミニストレーションなどに関する知識・技術(技能)が有用との見解がある(伊藤 2011)²⁵⁾。

以上のように、保育士にはソーシャルワークの視点から保育や相談援助を行うことが要請されている。保育を学ぶ学生は、親支援について、その相談内容に応じた面接形態を選択して、効果的なソーシャルワークによる援助に関する見解を持っている。したがって、ソーシャルワークの理論と方法を学び、面接技法について習得できるものと窺える。今後、保育士がソーシャルワークの理論と方法を習得するために、保育士養成における有効な教育プログラムのあり方を検討すべきであろう。

V. 結 論

本研究では、保育を学ぶ学生が子育てをする親に対する面接における形態が異なると、支援内容にどのように影響を及ぼすと認識しているのかを検討した。保育を学ぶ学生を対象として、子育てをする親に対するソーシャルワーク面接による支援の有効性をどのように捉えているのかを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票を用いて調査を実施した。面接形態の違いによって面接室と生活場面との面接形

態の違いに視点をあてて検討すると、多様で深刻な悩みには面接室、日常生活習慣や情緒的問題には生活場面面接が効果的と認識しているものと考察された。

引用文献

- 1) 相談援助演習 教員テキスト 社団法人日本社会福祉士養成校協会＝編集 中央法規出版 2009
- 2) 秋山博介・谷川和昭・柳澤孝主：責任編集 福祉臨床シリーズ編集委員会編 相談援助演習（社会福祉士シリーズ21）弘文堂 2008
- 3) 秋山博介・谷川和昭・柳澤孝主：責任編集 福祉臨床シリーズ編集委員会編 相談援助演習 第2版（社会福祉士シリーズ21）弘文堂 2014
- 4) 白澤政和・石川久展・福山和女 日本社会福祉士養成校協会監修 社会福祉士相談援助演習 中央法規出版 2009
- 5) 白澤政和・石川久展・福山和女 日本社会福祉士養成校協会監修 社会福祉士相談援助演習 第2版 中央法規出版 2015
- 6) 松山郁夫 実践モデルに関するソーシャルワーク演習 佐賀大学文化教育学部研究論文集 17(2) 71-79 2013
- 7) Baer, Betty, L and Ronald Federico Educating the Baccalauroate Social Worker Cambridge Mass. Ballinger Publishing Co 1978
- 8) W. W. Boehm, Objectives of the Social Work Curriculum of the Future, Council on Social Work Education, (1)1 1959
- 9) 小口将典 ソーシャルワーク実践における家族への臨床的面接：生活課題への対処行動に注目して 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇 (1) 29-37 2011
- 10) Perlman, H. Social Casework, A Problem-Solving Process, University of Chicago Press (Tx) 1957
- 11) 厚生労働省編 保育所保育指針解説書〈平成20年告示〉 フレーベル館 2008
- 12) 厚生労働省編 保育所保育指針解説書〈平成29年告示〉 フレーベル館 2017
- 13) Kadushin, A The Social Work Interview: A Guide for Human Service Professionals: 4th (fourth) Edition Columbia University Press 1998
- 14) 久保紘章 構造化されていない面接 ソーシャルワーク研究 16(4) 相川書房 1991
- 15) 小松啓 「生活場面面接」研究の構造と課題—『ソーシャルワーク研究』通巻95号における特集「生活場面面接」をめぐって ソーシャルワーク研究 相川書房 26(3) 18-22 2000
- 16) 厚生労働省 保育所保育指針〈平成29年告示〉 フレーベル館 2017
- 17) 石井哲夫 私説保育ソーシャルワーク論 白梅学園短期大学教育・福祉研究センター研究年報 7 1-3 2002
- 18) 伊藤良高・若宮邦彦・桐原誠・宮崎由紀子 保育ソーシャルワークのパラダイム—ケアマネジメント概念を手がかりに 乳幼児教育学研究 17 9-18 2008
- 19) 鶴 宏史 子育て支援における援助初期面接技法に関する考察（事例編）：保育ソーシャルワーク試論（その2） 神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要 2 55-65 2005
- 20) 安藤健一 保育ソーシャルワークに関する一考察～保育士による生活場面面接の可能性～ 清泉女学院短期大学研究紀要 27 1-11 2009
- 21) 土田美世子 エコロジカル・パースペクティブによる保育実践 ソーシャルワーク研究 31(4) 285-294 2006
- 22) 河野真寿美・岩間伸之 エコロジカル・パースペクティブと「状況の中の人」：ソーシャルワークの固有

性の検討 大阪市立大学生生活科学部紀要 47 183-190 1999

23)山本佳代子 保育ソーシャルワークに関する研究動向 山口県立大学社会福祉学部紀要 19 2013

24)同上12)

25)伊藤良高 保育ソーシャルワークと関係機関との連携 伊藤良高・永野典詞・中谷彪編（保育ソーシャルワークのフロンティア） 晃洋書房 2011

謝 辞

本研究における調査に対して，ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。